

試 試合終了のホイッスルが鳴った瞬間、駒大の優勝が現実のものとなった。しかし、その時駒大イレブンに笑顔はなかった。試合の結果は2-2の引き分け。第1試合目で法大が順大に引き分けたため、試合前に駒大の優勝がほぼ決まっていたとは言え、「勝って終わりたかった」(宮崎)。このすつきりしない終わり方に、「ちよっと悔しさが残る」(廣井)と悔しさを滲ませた。だが、優勝は優勝。部員の待つスタンドに駆け寄ると喜びを爆発させた。

試合は、前半お互い一步も譲らず拮抗した状態が続く。前半終了間際に筑波大FW木島の速いドリブル突破からゴールを脅かされるも、牧野のフラインセーブもあり、スコアレスで折り返す。試合が動いたのは後半。宮崎の蹴るCKから笹岡がゴール前へボールを入れ、その浮き球を原がDFに囲まれながらバイシクルシュート。劇的なゴールであった。原はアンダーシャツに仕込んだ「10 亮平」の文字を見せつけスタンドへ向かってヒッチを駆け抜けた。飛び込んだその先には、怪我で戦線離脱を余儀なくされた鈴木亮。2人は抱き合いゴールを喜んだ。その直後には、法大戦でも貴重な決勝弾を放った田谷が笹岡から受けたボールを左足でゴールへ。1点を取ったところまでは良かった(宮崎)が、2点リードするもこの後立て続けに点を返されてしまう。勝って優勝を決めたい駒大だが、むしろ逆にゴールを攻め立てられ勝ち越すことは出来ずに試合を終えた。

試合前、秋田監督は「俺たちの友情が一生続くのであればこの試合をみんなで獲ろう。それが友情の証になるんじゃないか」と選手に伝えたという。この長きに渡って行われたリーグ戦を戦い抜き、優勝という最高の喜びを掴み取った今、その友情の証が本物となった。

チーム全員で達成したリーグ制覇。皆一丸となって一人ひとりの責任を果たしたからからこそ手に入れること出来た称号。「(リーグを通して)選手がちよと大人になった」と秋田監督。ひと回り大きくなった選手の笑顔が眩しかった。(伊藤優香)



追加点を上げ喜びを表す田谷。法大戦には決勝点を決めるなどチームにとって貴重は働きをした
(撮影・野澤俊介)

関東1番! リーグを制す

JR東日本カップ 2005 第79回関東大学サッカーリーグ戦(後期) 1部リーグ 第22節

K駒澤大学2-2筑波大学A